

前田信彦『仕事と生活 - 労働社会の変容』ミネルヴァ書房（2010年）

東日本大震災をきっかけに、日本社会では人と人との“つながり”や“絆”が大切であるといった認識が強まっている。本書は震災以前に書かれたものであるが、職業生活を通じて形成される人間関係を構築する力が広く生活面でも影響を及ぼすことを発見し、この“関係性を構築する力”が真に豊かな人生を送るために必要不可欠であるとしている点で興味深い。

「仕事と生活研究史」の分野では1980年代後半に入り、それまでの日本における経済的繁栄が、過労死など深刻な社会問題をはらむ働き方に支えられていたという反省から、本当に豊かな社会とは何かという問い直しがなされるようになった。労働者の価値志向も“企業戦士”や“会社人間”といわれるような仕事重視型から、会社と適度な距離を保ち生活を優先させる生活重視型へと変化し、会社への帰属意識も低下した。個人の生活の重視と会社への帰属意識の低下に加え、ホワイトカラー層を中心とした労働の個別化の進展など仕事の変化は、職場でのコミュニケーションを減少させ職場の人間関係を希薄化させた。一方で、労働者は地域や家族、友人関係などのネットワークも弱く、いわば「関係性の貧困」に陥っているという。

著者は、「関係性の貧困」を日本の多くの労働者にとって共通の問題と考え、これを解決する手段として、「ワーク・ライフ・スキル」(以下、WLS)という概念を提示する。

著者は「WLSは関係性の貧困を克服するための鍵である」という仮説をたて、第4章で20代～50代の男性雇用労働者を対象に独自に行った調査から検証を行っている。そのなかでWLSは仕事をやる上で必要な「職務に関するスキル」、仕事と生活の両面で必要な「対人スキル」、仕事と生活の調和を図るための「ワーク・ライフ・バランスと生活管理のスキル」として概念が整理される。分析の結果、WLSの高い労働者は生活全般の満足度が高い傾向にあること、「他社への(職業能力の)通用性」に対する主観的評価が高く失業リスクが軽減されていること、仕事や生活の悩みを相談できるネットワークを保持していることといった事実を発見する。さらに、WLSの高低には職務経験が密接に関係しているとして、調査対象者のうち管理職層に焦点を当て、管理職はとりわけ職務遂行に関するスキルと対人スキルが高いことも明らかにする。管理職層でWLSが高い傾向にある要因は、長年の職業生活で培われた職務遂行能力に加え、WLSを獲得する機会、すなわち職場のマネジメントや部下の育成、職場内外との交渉などの諸経験がこの層で多いためだと分析する。また、同様の調査を定年退職者に限定して実施した結果からは、WLSの高い人ほど、定年退職後も地域社会の中で良好な人間関係を築いていることも明らかにした。以上調査で得られた事実から、WLSは長年の職業生活を通じて獲得されるもので、経験によって習得可能であるとの考えを明らかにする。ただし、「関係性の貧困」を克服するためにWLSが重要であることを明らかにしつつも、第5章では過重労働の問題を分析視角に加え、高いWLSを持っていても仕事量の多さから長時間労働が常態化した労働者が一定数存在すること、彼らは常に疲労を感じ健康不安を抱えている現実も浮き彫りにしている。加えて、非正規労働者場合には職務を遂行するためのスキル獲得の機会が少ないことにとどまらず、人間関係の調整、部下の育成経験、対外交渉などWLSを習得する機会を得にくいという問題も指摘する。

本書では「関係性の貧困」を乗り越え仕事と生活を豊かなものにするためのWLS、そのなかでも人と人との関係性を構築する能力が重要であり、これは職業経験から習得されること、つまり生得的なものではなく長年の職業経験によって得られることが示されている。同時に、長時間労働の常態化による健康不安といった問題から高いWLSを持つことだけで豊かな生活が実現されるわけではないこと、WLSを習得する機会には正規労働者と非正規労働者との間で差があることなど、労働社会が抱える問題点との関連も見逃さない。本書では問題への対応策が具体的に展開されるわけではないが、変容する労働社会ではそれぞれの労働者が抱える問題に応じた対策の重要性も指摘している。長時間労働対策に加え、職務経験によるWLSの差を問題としてとらえた“スキルを習得する機会は平等に与えられるべき”という著者の主張は、変容する労働社会に貴重な示唆を与えていると思う。(仲塚 周子)